

Contents

特集：党大会後のゴア対ブッシュ	1p
<今週のThe Economistから>	
“What the Internet cannot do” 「インターネットができないこと」	7p
<From the Editor> 「党大会の報道」	8p

特集：党大会後のゴア対ブッシュ

米国大統領選挙の最大の勝負どころは夏の党大会である。ここで3つの注目材料が出揃う。ひとつは副大統領候補 (Presidential Ticket) の指名。ふたつめは両党の政策綱領 (Platform)。そして大統領候補の受諾演説 (Acceptance Speech) である。これらが分かっではじめて、有権者は投票行動を検討することができる。

「米国民はレイバーデー（今年は9月4日）が過ぎてから、どの候補を選ぶか考える」といわれる。逆にいえば、それ以前の世論調査にはあまり意味がないのである。ゴア副大統領、ブッシュ・テキサス州知事という2人の候補者は、すでに上記3種の手の内をオープンした。これから先はいよいよ終盤戦。最終決戦の行方を読むために、この夏、両者がどのような決断をしたかを分析してみよう。

副大統領：「即戦力の実務家」vs「評判のいい人格者」

「副大統領が注目を集めるのは、指名を受けてから3日間だけ」といわれる。アメリカにおける副大統領の地位は、その程度にしか過ぎないというわけだ。

その反面、いい”Running mate”を選択することで、一気に選挙戦を有利にした例も少なくない。もっとも近い例が、ほからなぬ92年のクリントン＝ゴアのコンビである。南部出身、同年代、考え方も体格もよく似た2人の組み合わせは、従来の発想からは論外の選択だった。しかしクリントンとゴアを並べて写真を撮ってみると、「絵」になったのである。愛嬌があっちょっとルーズなクリントンと、政策通で堅物のゴアという補完的な性格も幸いした。クリントンはゴアを選んだ瞬間に支持率でブッシュを抜き、そのままリードを守ってゴールインした。

副大統領候補を選ぶときに重要なのは、何はさておいて意外性である。その意味では**今回の人選ではゴアに軍配が上がる**。ブッシュが選んだディック・チェイニー元国防長官は、決定したその日にコンコルド機が墜落し、トップニュースにならなかった不運はさておくとしても、常識的な人選であったために、たちまちメディアは関心を失ってしまった。逆にゴアが選んだリーバーマン上院議員は、選挙対策本部のスタッフさえもが驚いたほど意外な決断で、「今回の選挙戦で最大の劇的な展開」とまでいわれた。

それではブッシュがまずい人選をしたのかといえば、そうではない。ブッシュは州知事1期の経験しかなく、外交や安全保障などが弱点。それをカバーする意味で、チェイニーは申し分のないパートナーである。つまり、選挙で勝つためではなく、勝ってから後のことを考慮した人選だった。**ブッシュが求めたのは即戦力の実務家であり、ペンタゴンを思い通りに動かし、湾岸戦争を勝利に導いたチェイニーは、うってつけの人物であった。**

ただし選挙戦を戦う上では、チェイニーは「少々難あり」の相棒である。レーガン政権下で下院議員を務めた時代の投票行動は、あまりにも右寄り過ぎてディベートの際に攻撃目標となるだろう。長女がゲイであることを広言しているという「弱み」もある。それでも、支持率でゴアをリードしていたブッシュとしては、これらの問題に目をつぶる余裕があった。

反対にゴアは、副大統領候補選びを劣勢挽回のきっかけにしなければならなかった。こちらは勝つために選んだ候補者だった。『ワシントン・ウォッチ』8月14日号で、山崎一氏はリーバーマン指名の背景を以下のように解説している。

クリントン大統領の影を払拭する（98年の不倫もみ消し疑惑を痛烈に批判していた）

宗教票の開拓（敬虔なユダヤ教徒としての姿勢は、他の信心深い宗教票の発掘に資する）

中道・無党派層を取りこむ（中道寄りの政策をアピールできる）

地域バランスがいい（南部と東部の組み合わせ。フロリダなどユダヤ人の多い州も狙える）

「移民の子」の集票力（夫婦そろって両親と共に米国に渡ってきた移民の子）

ゴア自身が、みずからの新しいイメージ（人間味がある、政治が分かる）を示せた

ゴアの最大の弱点は、8年間にわたってクリントンの陰に隠れてきたことである。共和党はかならず、過去のクリントン政権のスキャンダルを攻撃してくる。しかし**人格者として評判の高いリーバーマンとコンビを組むことで、ゴアは「脱クリントン」のイメージを演出**することに成功した。知名度はそれほど高くないものの、リーバーマンは「あの人が言うのなら間違いはない」と人々が納得するようなタイプである。幸いゴアとの間には、15年間にわたる家族ぐるみの付き合いがあり、気心は知れている。ゴアは決定に当たってはわざわざ面接を実施せず、電話1本でリーバーマンに指名を伝えている。

米国の投票用候補者名簿票(Ticket)は、正副大統領が連名になっている。このことから正副のペアを“Ticket”と呼ぶ。ブッシュ(54)＝チェイニー(59)とゴア(52)＝リーバーマン(58)のチケットは、全員が50歳台で両方とも副大統領候補の方が年上となった。選び方は対照的だったが、いずれも納得のゆく人選だったのではないだろうか。

政策綱領：内政重視、焦点は財政黒字

党大会では、党としての政策をまとめた綱領(Platform)が発表される。これが大統領候補者の公約となる。内政から外政まで、あらゆるアジェンダを取り上げているので、両党の考え方の違いが非常にはっきりする。

2人の政策の対比¹

アルバート・ゴア（民主党）	アジェンダ	ジョージ・W・ブッシュ（共和党）
人工中絶では女性に選択の権利を	社会	レイプなどの場合以外人工中絶に反対
政府支援による価格維持を維持	農業	農産物価格維持に反対
候補者に対する選挙資金を助成	政治資金問題	個人献金の限度額を\$1000から\$3400へ
少数派優遇措置を支持	人種融和問題	クォータや少数派優遇に反対
前方関与政策、ゲイを軍に登用	防衛	NMD配備、核軍縮
社会保障費に2.2兆ドル組み入れ、債務を640億ドル返済、高齢者医療充実	経済（税制）	5年間で4600億ドル、10年間で1.3兆ドルの減税。所得税を簡素化
地球温暖化のための京都議定書を支持	環境	京都議定書に反対
P N T R支持、台湾安保強化法に反対	外交	P N T R支持、台湾安保強化法に賛成
黒字を活用して社会保障基金を維持	社会保障	社会保障の部分的民営化を支持

しかるに実際に比較をしてみると、**両者ともに中道寄りの姿勢を取っていることもあり、決定的な違いはそう多くない**。ゴアとブッシュはどちらも二世政治家であり、ゴアは民主党右派、ブッシュは共和党左派に属する。今年の選挙戦を「従兄弟同士の戦い」と呼ぶ向きもある。

今年の選挙戦においては、外交や安全保障問題は大きな争点にはなりそうにない。徹頭徹尾、内政が勝負になるだろう。中でも**最大の焦点は財政黒字の使い方**である。ゴアは現政権の方針を継続し、高齢化社会の到来に備えて社会保障費とメディケア（高齢者医療）の充実を図り、同時に過去の政府赤字の償還を実施するとしている。逆にブッシュは、「政府の黒字は国民のもの」として大規模減税を要求している。向こう5年間で4600億ドルという減税は、米国経済の名目GDPが約9兆ドルであることを考えても、十分に巨額なものだと理解できよう。

それ以外で注目を集めそうなのは社会政策である。なかでも**「銃規制」「人工中絶」などは米国社会を二分する問題**だけに、大きなテーマになる可能性を秘めている。現在、最高裁判事は保守派5人、リベラル派4人の陣容。任命権は大統領にあるので、ゴア政権誕生であれば今後はリベラル派の数が増え、人工中絶を合憲としたRoe v Wadeの判決は覆らない。しかしブッシュ政権誕生となると、再び保守派判事が増えるので、「女性の選ぶ権利」が危うくなる。「最高裁判事の陣容」は、大統領選挙の隠れたファクターである。

外交問題で目を引いたのは、**共和党側が「対アジア外交の中心は日本」と明確に書いたこと**である。民主党側もこれに引きずられるように「日本重視」を盛り込んだが、「公正な貿易」を注文することも忘れなかった。

¹ <http://www.cnn.com/ELECTION/2000/resources/where.they.stand/index.html>

受諾演説：政策より個性を売り込む

両者の受諾演説は、どちらも成功を収めたといえる。

ブッシュは好感度の高いスピーチを行った。たとえば冒頭、「ここフィラデルフィアには建国の祖が集まった。その中の一人、ジョージ・ワシントンは”George W.”と仲間から呼ばれていた」と言って笑いを取った。初代大統領に自分を重ねるとはなんと厚かましい、という気もするが、こういう気安さがジョージ・W・ブッシュの持ち味である。

「われわれは繁栄のさなかにあるが、このよき時代を何の目的に使うのか。クリントン＝ゴア政権はこのチャンスを無駄にしてきた」 ”They have not led. We will.” (**彼らがやらないなら、われわれがやる**)という印象的なフレーズを、ブッシュは4回も繰り返した。

政策的については、社会保障と高齢者医療、教育、減税、外交という順序で取り上げた。まるで民主党の候補者のようである。テキサスでの少年時代を語り、民主党出身の副知事を追憶し、少年院で出会った不良少年や、ホームレスのために働く女性の話をしながらか、みずからの信条である「温情ある保守主義」を訴えた。17回も書き直したというだけあって、練りに練られた内容だった。**「育ちはいいけど気安くて、思考は中道寄り、ワシントン政界から遠い政治家」**というイメージを浸透させる効果があったといえる。

これと反対にゴアのスピーチは、これまでクリントンの陰に隠れてきた過去から脱却するためのものだった。「今宵、私は自分自身(my own man)としてここに立ち、私の真の姿を知ってもらいたいと願っている」とゴアは切り出した。過去8年の業績についてはさりと触れただけで、「この良き時代にもかかわらず、私は満足していない」と政権担当意欲を前面に出した。そして**「大統領として、働く家族(working families)のために戦う」**と宣言。戦う相手としては「タバコ会社、石油資本、公害企業、薬品会社、健康医療団体(HMO)」などを名指しにする。実に戦闘的な姿勢である。

ゴアは、「真面目で政策に強いが、退屈で温かみのない政治家」というイメージが定着している。それをどうやって打ち消すかが課題だったが、ゴアはいつも通り政策について多くを語り、最後にこう締めくくった。「自分の欠点は自覚している。今夜もそうだったかもしれない。しかし大統領職は人気コンテスト以上のものだ。ときには人気を犠牲にして、正しいことを選ばねばならない。私は面白い政治家ではないかもしれないが、今宵こうして誓う。あなた方のために日々戦い、けっして失望させないことを」

退屈なイメージを払拭するために、選挙戦中のゴアはいつもカジュアルな服装で通してきた。しかし受諾演説では、ダークスーツに白いワイシャツにえんじ系のネクタイ。こういうフォーマルな服装をしているときが、いちばんゴアは「らしく」見える。**受諾演説のゴアは、聴衆にこびることなく、「中味で勝負」と開き直った**。妻以外の誰にも相談せず、ただ一人で書いたスピーチであったそうだ。

2人の受諾演説は、それぞれの個性を売り込んだ名勝負となった。

「カンガルー同士」の戦い？

2000年選挙は、昨年3月にはもう始まっていた。非常識なまでに早い時期に始まってしまった結果として、両候補の周囲には新政権入りを目指すスタッフが十分すぎるほど集まっている。そのため、現時点で早くも政権誕生時の閣僚ポストが噂されるほどになっている。

以下はブルース・ストークス外交評議会上級研究員の予想²を中心にまとめたものだが、これが当たるかどうかはさておき、選挙前にここまで予想が可能になるというのは、相当にユニークな事態といわざるを得ない。

予想される閣僚名簿

ゴア大統領 リーバーマン副大統領

国務長官：リチャード・ホルブルック（現国連大使）

国防長官：？

財務長官：ローレンス・サマーズ（現職留任）

USTR：ローラ・タイソン（元CEA委員長）

安全保障担当補佐官：レオン・ファース（副大統領スタッフ）

その他：経済閣僚としてアラン・ブラインダー（元FRB副議長）

ブッシュ大統領 チェイニー副大統領

国務長官：コリン・パウエル（元統合参謀本部議長）

国防長官：ポール・ウォルフowitz（元国防次官）

財務長官：ローレンス・リンゼー（元FRB理事）

USTR：ロバート・ゼリック（元国務長官顧問）

安全保障担当補佐官：コンドリーザ・ライス（スタンフォード大学教授）

その他：対日関係のキーマンとしてリチャード・アーミテージ（元国防次官補）

ゴア政権では、サマーズ財務長官などのスタッフが残り、クリントン政権の政策を継承することになりそうだ。これは常識的な線といえよう。

挑戦する側のブッシュ政権も、骨格はほとんど固まりかけているのが面白い。一説によれば、「次官補クラスまでほぼ決まっている」という。共和党の有力者の間では、「2001年にはホワイトハウスを奪還する」という思いが強く、早い時期から候補者をブッシュ人に絞り込んできた。おかげで手堅い人材を集めることができたが、新鮮味にはやや欠ける。

² 「政策ブレンから読むブッシュとゴアの政権構想」（Foresight 2000, No.8）

今回の大統領選挙に対しては、「カンガルーチーム」というあだ名も捧げられている。その心は、ゴアもブッシュも今ひとつ頼りないが、後ろ盾はしっかりしている 前足は細いけれども、後ろ足と尻尾が強力な武器になるカンガルー同士の戦い、というわけだ。

しかし両候補に強力なスタッフが揃っていることは、悪い話ではないはず。名著『ベスト・アンド・ブライテスト』の冒頭に、当選したばかりのジョン・F・ケネディが、「選挙に明け暮れてきたために、まともなスタッフがいない」と嘆くシーンがある。それに比べれば、まことに恵まれた状況といえよう。

結論：ゴアがやや有利か？

それではゴアとブッシュ、最後の勝利を得るのはどちらだろうか。

時期的には少し早いのだが、筆者はゴアが若干有利、と見ている。挑戦者が勝つ場合には、夏の時点で20ポイント程度の大差をつけ、そのままゴールインするのが望ましい。現職副大統領であるゴアの側には、政権に就いていることを生かしているんな反撃に出る手段が残されているからだ。現在の支持率が「互角」であることは、ゴアがわずかに優勢であることを意味すると考えた方がいい。

以下に双方の強み、弱みを列挙してみよう。

<ゴア陣営>

強気材料：議員として16年、副大統領として8年の経歴を積んでおり、ディベートに強い。

スキャンダル・チェックが済んでいるおり、新たな悪材料が出そうにない。

弱気材料：「退屈なゴア」のイメージが定着している。

党内リベラル派が離反し、第三政党のラルフ・ネーダー支持に向かう恐れ。

ヒラリー・クリントンのNY上院選出馬に対する反感。

<ブッシュ陣営>

強気材料：ブッシュ本人に対する有権者の好感度が高い。

民主党に比べ、共和党支持者がブッシュ支持で団結している。

仮に選挙当日までに株価の暴落があれば、ブッシュ勝利は決定的になる。

弱気材料：これまで支持率で保ってきたリードが急速に縮まっている。

ブッシュに個人スキャンダルがあるという噂あり。

これだけだと、どちらが優位というほどの決定打は得られない。筆者が「ゴア優勢」と判断する理由は以下の通りである。

- ・ 主要な政策の論点で「正論」の側に立っていること。ブッシュが主張するような大規模減税を実施すれば、米国経済はインフレ突入の可能性が高い。ルービン～サマーズによる、「社会保

障費の充実と債務の返済」という路線の方が正解と見る。銃規制や環境問題においても、ブッシュは苦しい答弁を余儀なくされるだろう。

- ・クリントンは史上最強の選挙スタッフを率いていたが、その経験がゴア陣営にも引き継がれている。副大統領指名の発表などで、ゴア陣営は広報上手ぶりを発揮している。CM攻勢ではブッシュが物量作戦でリードしているが、選挙戦術ではゴアに一日の長がある。

大胆に言えば、ブッシュ陣営は豊富な資金にモノをいわせる長嶋巨人軍である。戦力の優秀さは誰もが認めるが、ベテラン勢が多く、いざというときに不安がある。それに対し、ゴア陣営は決め手には欠けるものの、チーム全体に勝利への執念が染み込んだ西武ライオンズである。日本シリーズで両者が激突するとしたら、筆者であれば西武に利があると見る。逆に言えば、その程度のきわどい差の勝負だともいえるのだが…。

< 今週の “The Economist” から >

"What the Internet cannot do" August 19th, 2000 On the cover

「インターネットにできないこと」(p11-12)

*** 新しい時代には行き過ぎた楽観論が生じるもの。それに気づくには、高度な常識と歴史への視座が求められる。The Economist 誌が本領を発揮しているようなコラムです。**

< 要約 >

「このような発明が誕生したからには、偏見や敵意はもう存在できなくなるだろう」
こんな声は、1858年に海底ケーブルが引かれたときにもあった。新しい技術が誕生すると、人々はとかくこの手の予言を口にする。とくにインターネットについては、「戦争を防ぎ、汚染を減らし、不平等と戦う」などという乱暴な楽観論がある。インターネットはまだ若い技術だとはいうものの、こういう予言が当たるかどうかくらいは見当がつく。

MITあたりの教祖たちからは、「未来の子供たちは、ナショナリズムが何たるかを知らなくなる」「コンピュータによって平和がもたらされ、人種偏見や国家の崩壊は食い止められる」などの意見が聞こえてくる。しかし、新技術が平和をもたらすというアイデアは新しくはない。20世紀、飛行機やラジオが誕生するたびに、もう戦争は不可能になったという声は出た。戦争は相互の誤解から生じる、と考えるから間違うのである。仮にそれが真実だとしても、インターネットは紛争を拡大するためにも使われる。コミュニケーションを良くすることは、かならずしも戦争を終わらせることにはならないのだ。

では、エネルギー消費や汚染を減らす効果はあるだろうか。97-98年の米国経済は9%の成長を遂げたが、エネルギー需要は伸びなかった。「紙やCDが電子化され、トラックが光ファイバーに代わったからだ」という推測がある。あいにくだが、地球を救うにはそれだけでは難しい。運転して買い物に出かけるよりは、オンラインショッピングの方が汚染は少な

くて済む。しかし家庭に商品を届けるのはやはりトラックである。電子上で新聞や雑誌を読めば、その分の印刷や輸送の効率は改善できる。たしかに実物と置き換わるだけならばエネルギー効率は良くなるが、読まない紙の量が増えるだけかもしれない。

さらに、より多くの事務所や家庭がインターネットにつながるようになれば、莫大なエネルギーが消費される。ホームコンピュータが日常生活の一部になると、一日中点けっぱなしになりがちである。米国の電気消費量の8%はインターネットにつないだPCによるという。シリコンバレーでは、サーバー工場があまりに増えたために停電が増えている。

それではインターネットが不平等を減らすという点はどうだろう。クリントン大統領は、インターネットへのアクセスを広げることで収入格差を減らせると言う。しかしネットの使用コストが減少するにつれ、デジタル・ディバイドの真の原因は所得ではなくて能力であることがわかってきた。識字率を高めることの方が先決なのである。

それでも予言には、幾分かの実態は含まれている。政府が支配できない開かれたネットワークは、個人に力を与え、民主主義を涵養する。民主主義の拡大は平和につながるだろう。インターネットで監視の目が広がることにより、環境は改善し、エネルギー効率も高まるだろう。不平等に関して、バンガロールのプログラマーがシアトルにあるソフトウェア会社のために働いて、高い賃金を得ることができる。違う国で同じ仕事をしている人の格差は減少するだろう。もっとも同じ国で情報関連とそれ以外の仕事の格差は広がるだろう。

インターネットは多くのことを変える。ビジネスや個人の生活も変える。しかし人間の行動そのものが変わるかどうかは定かではない。戦争や汚染や不平等はおそらく生き残る。人間の本性は愚かにもそのまま、技術の予言は何度も繰り返されるのではないだろうか。

<From the Editor > 党大会の報道

皆さん、ご無沙汰いたしました。3週間ぶりに本誌をお届けします。久しぶりに書くので、今週は自分がいちばん好きな話題を取り上げました。

4年に1度の大統領選挙はいろんな情報が飛び交いますが、今年ほど情報収集が楽な選挙はありません。なにしろインターネットという便利なものがあります。政策綱領も受諾演説もその日のうちに全文を入手できました。読み比べてみたい人のために、それぞれの場所を下記しておきましょう。

ブッシュ・テキサス州知事の受諾演説：

<http://www.cnn.com/ELECTION/2000/conventions/republican/transcripts/bush.html>

共和党の政策綱領：

<http://www.rnc.org/2000/2000platformcontents>

ゴア副大統領の受諾演説：

["http://www.latimes.com/news/politics/elect2000/pres/demconven/speeches/gore_a.htm"](http://www.latimes.com/news/politics/elect2000/pres/demconven/speeches/gore_a.htm)

民主党の政策綱領：

["http://www.dems2000.com/AboutTheConvention/03_partyplat.html"](http://www.dems2000.com/AboutTheConvention/03_partyplat.html)

一方、ブッシュもゴアも、やはり本人の声や周囲の歓声を聞き、派手な舞台や本人のファッションを見ないと臨場感がありません。その点はCNNがありますし、なんとNHKがハイビジョン中継までしてくれました。こんな映像が見られるというのも、マルチメディア時代のご利益というものです。

今年の党大会は、テレビ視聴率が共和党で26% (-2%)、民主党が28% (-5%)とそれぞれ1996年を下回ったそうです。しかしインターネット上の視聴率を考えれば、有権者の関心が低下したと懸念する必要はないでしょう。CNNやヤフーでは、時々刻々と変化する選挙情勢を非常に整理した形で報道してくれています。ヤフーにはなんと両者の選挙CMを、まとめて掲示しているページまであります。これならCMを見落とす心配もありません。（["http://politics.yahoo.com/politics/Features/Campaign_Ads"](http://politics.yahoo.com/politics/Features/Campaign_Ads)）。有権者が政治行動を決める場合に、これだけ多くの判断材料が提供されるという時代はかつてなかったでしょう。

インターネットは選挙戦を確実に変えつつあります。やがては政治そのものをも変えてしまおうでしょう。アメリカは民主主義の総本山であり、近代的な選挙制度を生み出した国。選挙の手法においても世界の最先端を行っているようです。

おかげで海外にいる者も、米国大統領選挙を存分に観戦することができます。ただし問題は通信コスト。夏休み中についつい自宅から長時間アクセスをしてしまったため、電話代がいくらになったかがちょっと怖い今日この頃です。

編集者敬白

- 本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、日商岩井株式会社の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記にてお願いします。

日商岩井ビジネス戦略研究所 吉崎達彦 TEL: (03)3588-3105 FAX: (03)3588-4832

E-MAIL: yoshizaki.tatsuhiko@nisshoiwai.co.jp